

様式 1

研究報告書（平成 26 年度）

提出者 林 樹

提出年月日 2015年3月31日

【本ユニットにおける研究テーマ】

和文 仏教原子論と現代形而上学

英文 Buddhist Atomism and Contemporary Metaphysics

【研究のねらいと目的】（600 字程度）

ヴァスバンドゥなど所謂「アビダルマ仏教」は全てのマクロ的存在物一人を含む一は真の存在ではなく、真に存在するのはそれらを構成するマイクロ的極微一法（ダルマ）一のみであるとする。そしてこれらの法は時間の広がりを持たない、刹那的存在であるとする。ここからアビダルマ仏教的な、空間的・時間的原子論がでてくる。ただ、アビダルマ仏教論者は、究極的に存在するのは刹那的原子である法のみであるが、世俗的には法から構成される空間的・時間的広がりを持つもの一人などが認められるとする。では世俗的な意味ではものの空間性や連続性はどのように説明できるのか、これらのことを現代形而上学に照らし合わせて考察することを本研究の目的とする。

研究の狙いは、西洋哲学を背景とした学者達により理解し易い形でアビダルマ仏教哲学を考察することであり、インド乃至仏教哲学を背景とした学者たちに、インド哲学の現代哲学への関連、適用、貢献の可能性を示唆することである。

【研究業績】 学会報告・論文など

論文

“Persons as Weakly Emergent: An Alternative Reading of Vasubandhu’s Ontology of Persons”, *Philosophy East and West* 67:2 (2017 年 4 月掲載予定)

学会発表

2014 年 6 月 “Are Buddhists Perdurantists? – Buddhist Philosophy in Contemporary Discussion of Persistence”
49th Annual Conference for Society for Asian and Comparative Philosophy
State University of New York at Binghamton

2014 年 10 月 “Ontology of Discontinuity: Buddhism and Descartes:
I Buddhological Conference
Center for Comparative Studies of Civilizations, Krakow

2015 年 2 月 “Can Flux bring about Flux? – The Inconclusiveness Objection against Radical Impermanence and Buddhist Response”
The 4th Forum for Japanese and Comparative Philosophy
Kobe University

2015 年 3 月 “What Causes the Sprout? Buddhist Accounts of Cooperative Causation”
2015 KU-NCCU Graduate Workshop on Asian Philosophy
National Chengchi University, Taipei

【成果の概要】（800字程度）

今年度の成果の中で最も大きいのは次の二点である。

1) 仏教原子論、還元論と創発論

アビダルマ仏教では人は虚構であり、究極的にはそれを構成する法のみ存在するとする。このことから Mark Siderits (2003) は、人は法に還元される、還元論的解釈をとり、この解釈をベースに仏教倫理観を説明した。本研究ではこれに反対して、還元論では倫理が説明できないこと、そして弱創発論を採れば統合的に倫理の説明ができると論じた。本研究の成果はジャーナル論文として2017年4月に *Philosophy East and West* から出版される。

2) 刹那滅論における連続性の理解

刹那滅論では連続性は「流れ」(santana) という概念で理解される。本研究ではこの「流れ」がどのように続いていくのかを、現代形而上学における連続性の諸説と照らしあわせて考察した。まず Exdurantism という説と刹那滅論が表面上では非常に近いことを指摘し、Exdurantism との決定的な違いがあることから、実は Perdurantism という説とより共通点が認められることを明らかにした。最終的には、現代形而上学のターミノロジーを使うと、刹那滅論における連続性は、Reverse Exdurantism または Quasi Perdurantism と理解できると指摘した。本研究の成果は、49th Annual Conference for Society for Asian and Comparative Philosophy (State University of New York at Binghamton, 2014年6月)で発表した。

【通信欄】